

周辺の
みどころ

南郷洗堰の周辺には琵琶湖治水関係の施設をはじめ、石山寺をはじめとする寺院も数多くみられる。

- 水のめぐみ館「アクア琵琶」
琵琶湖の治水や利水、水環境などについて学べる施設。南郷洗堰の歴史的な資料も展示。
- 石山寺
西国三十三カ所観音霊場の第13番札所。国宝の本堂、多宝塔のほか数多くの国宝、重要文化財等が所蔵されている。



アクア琵琶



[アクセス]

- JR琵琶湖線「石山駅」下車
京阪バス「南郷洗堰」バス停下車、徒歩2分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

●滋賀県教育委員会『滋賀県の近代化遺産』平成12年

旧南郷洗堰

大津市大日山四丁目



旧南郷洗堰遠景

豊かな水源である琵琶湖から流れ出す瀬田川は古来より水量の調整が難しく、幾度も水害に見舞われてきた。

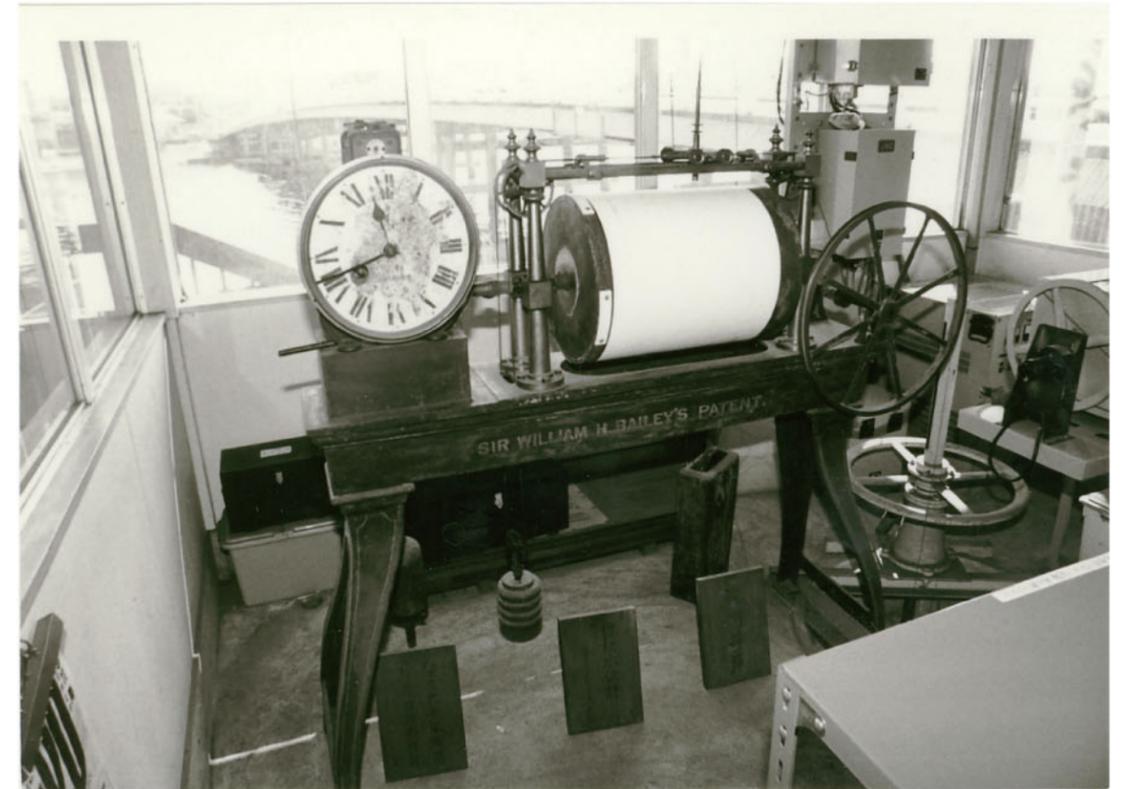
人々の治水への働きかけは江戸時代にさかのぼり、数々の試みがなされた。旧南郷洗堰は明治時代末期に日本人技術者によって建設され、人力で作動された大規模な施設で、流域の治水に本格的に貢献した記念碑的存在である。

洗堰によって周辺の洪水防御、琵琶湖の水位維持、下流河川の機能維持ができ、水の恵みを受けることが可能となったのである。近代土木技術がもたらした水の宝である。





下流側からみた旧南郷洗堰



自記水位計（上）
水のめぐみアクア館元休憩所（左下）



段を金具にフックをかけてウィンチで下ろし、百貫モンキーと呼ばれる重りを打ち付けて隙間無くはめ込む。開けるのは同様にウィンチで、水を吸ってさらに重量を増した角材を引き上げる。一連の作業はすべて人力で行なうため、大変な労力を必要とし、全閉には2日、全開には1日を要した。悪天候の中でも作業は行なわれ、熟練と勘どころが必要とされる厳しい仕事であった。

建設技術に加えそうした熱意や努力によって、旧南郷洗堰は明治から昭和にかけて琵琶湖治水の重要な役割を果たしたのである。

なお、洗堰の建設にともない明治時代に英国から輸入された自記水位計が、今なお唐橋のたもとで琵琶湖の水位を記録し続けている。国内唯一、かつ最古の水位計とされ、まさしく琵琶湖治水を見つめ続けてきた生き証人である。

新洗堰の建設

昭和36年、下流100mの位置に瀬田川洗堰が新たに建設された。新堰は電動で遠隔自動制御である。

新洗堰によって旧洗堰は役目を終えたが、左岸に堰柱7個と護岸、右岸に堰柱2個と護岸が近代の治水を代表する歴史遺産として保存された。平成14年には土木学会選奨土木遺産に認定されている。

また、左岸に建つ木造一階建の洋風建築は、明治44年に現在地より約100m上流に建設され、洗堰看守場、監視所、管理所として、約50年間洗堰と瀬田川の水利を見守ってきた。その後、出張所、資料館に転用され、平成3年に現在地に移築・改装し、水のめぐみアクア館の休憩所として使用されていた。

旧南郷洗堰

所在地 大津市大日山四丁目

求められた琵琶湖治水

旧南郷洗堰は明治33年(1900)から41年(1908)にかけての淀川改良工事の中で、特に重要な事業として計画された、明治期最大の32連煉瓦、石造角落洗堰である。

琵琶湖は四方を山に囲まれ、多くの川が流れ込む一方、唯一の出口が瀬田川であった。特に南郷付近は川幅が狭く水が流れにくい上に、雨が降ると田上山から土砂が流れ込み水はけが悪くなる。洪水防止には浚渫が重要であるが、川の流れがよくなると、流量が増える。すると洪水時には下流域が危険であり、渇水時には琵琶湖の水が流れ出しすぎて水位が低下する。その解決策として、瀬田川の流量を調節する施設である堰が必要となった。

明治17年(1884)、滋賀県知事井弘が堰の必要性を唱え、その後何度かの洪水を経験した後、ついに計画が本格化した。

南郷洗堰建設

洗堰は明治35年(1902)着工、37年7月に本体工事が完成、38年に竣工した。設計は大阪土木監督署の長沢技師による。長沢は約1年間、欧米の堰を調査し、結果としてオランダの技術を取り入れた。堰は堰幅合計172.71mで、幅1.82m、高さ5.91mの堰柱31個からなる。堰柱上に橋を設けるが、当初は木造、後にコンクリート造に改築された。

堰は全部で32門、堰柱上にレールを敷き、開閉時に材を運び込んでウィンチで扱った。堰操作は基本として、琵琶湖常水面以下3尺までは下げない、増水時は堰桁を3尺にして琵琶湖の水位を保持、洪水時は下流河川の状態を見て堰を閉め、水位が4～5尺になれば開放するという考えで行なった。

堰を閉めるのは「角落とし作業」と呼ばれ、金具の付いた4.2mの8寸角の角材を落とし込む。角材は100kg以上あり、全閉時には15～17